

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

2021年の英國における芝の平地競馬が、3月27日のドンカスター競馬場における開催で幕を開ける。皆様もご存知のように、コロナ禍に見舞われた昨年は春の3歳クラシックの日程が大幅に狂つたが、今年は今のところ、例年通りのスケジュールで開催される予定だ。

今回のこのコラムは、6月5日にエプソムで行われる第242回英國ダービー（芝12F6Y）へ向けた前売りで、マツケメイカー各社が17～21倍のオッズを掲げ、2番人気から5番人気に推している、マックスウヰー（牡3歳、父ニードルアーフローラー）を取り上げたい。

愛国の調教師ジム・ボルジャー氏の生産馬で、夫人のジャッキ・ボルジャーさんが所有するのがマックスウヰーだ。管理するのは当然のことく、ジム・ボルジャー師である。

昨年6月28日にカラのメイドン（芝7F）でデビュー。緒戦は5着に敗れた後、7月18日にカラで行われたメイドン（芝7F）を制し、デビュー2戦目に初勝利を挙げている。

8月6日にレバースタウンで行われたG3タイロスS（芝7F）は9着に敗れたが、8月22日にカラで行われたG2ラユーチュリティS（芝7F）を制し重賞初制覇を果たした。

続いて出走した、9月1日にカラで行われたG1ナショナルS（芝7F）は再び8

着という大敗に終わつたが、10月24日にドンカスターで行われたG1フューチュリティロワリー（芝8F）では一変して快勝。G1制覇を果たして2歳シーズンを終えている。

G1フューチュリティロワリーとは、過去20年の勝ち馬のうち、01年のハイチャバラ、04年のモティヴエイター、06年のオソライズド、11年のキャメロット、13年のキングストンヒル、17年のサクソンウォリアー、18年のマグナゲレシア、19年のカメコと、実に8頭までもが3歳時にクラシック制覇を成し遂げているという出世レ

ースで、だからこそ20年の勝ち馬マックスウヰーも、英國ダービーの有力候補に挙げられているのである。

既にお気づきと思うが、マックスウヰーのこれまでの成績には、おおいにカラがある。

重賞競走を走るようになってからの同馬には、わかりやすい傾向があつて、9着や8着に敗退した時の馬場状態はいずれもGood（良）。一方、G2フューチュリティSを制した時のカラはSoft（重）で、

G1フューチュリティロワリーを制した時のドンカスターはHeavy（不良）だった。危うさを感じさせる潮流だと筆者は思つたが、そういう意味でもマックスウヰーの今後を注視する必要がありそうである。

成績に特徴があるだけでなく、血統背

景にも特筆すべきものを持つのがマックスウヰーだ。本馬は前述したように、ジム・ボルジャー夫妻による自家生産馬なだけ、母ハラナサオワール（父デオフロー）も、祖母シアムムサ（父クエストフォーフェイム）もジム・ボルジャー夫妻による自家生産馬で、さらに、G1英ダービーを含む5つのG1を制した父ニードルアーフローラーを管理していたのもジム・ボルジャーだった。また、母の父テオフィロは06年の歐州2歳チャンピオンなのだが、同馬もまた、ボルジャー夫妻の自家生産馬で、管理していたのはボルジャー師であった。

つまりは、きわめて純度の高いボルジャー血脈を背景に持つマックスウヰーは、同時に、ガリレオの2×3という、きわめて濃いインブリードを保持しているのである。37.5%が同一種牡馬という近親交配は、近年では3連覇を果たしたG1キンギジョージ6世＆ケイーンエリザベスS（芝11F2-1-1Y）を含めて11のG1を制した工ネイブルが、サドラーーズウェルズの3×2を保持していたことで、つとに知られている。

欧洲の馬産家たちはもはや、37.5%をタブー視しなくなつているのだろうか?! すなわち、道悪が大層上手な馬で、春のクラシックも良馬場では苦しいだろうが、重よりも悪化すると急浮上するタイプと見て間違ひなさそうである。